

【ポスター発表】

「実習前評価システム（短期大学版）」の試行的実施による学生の変化

—記述式課題の結果とアンケート調査から—

○帯広大谷短期大学 阿部 好恵 (8748)

キーワード：実習前評価システム（短期大学版）、自己覚知、アンケート調査

1. 研究目的

本学は、北海道内で唯一社会福祉士養成を行う短期大学として日本社会福祉士養成校協会北海道ブロックが施行する実習前評価システムを踏襲し、短期大学の状況に即した「実習前評価システム（短期大学版）」を考案し、施行してきた¹。現在、本システムをA大学短期大学部（以下、A短大）で試行し、学生の事前指導に活用するとともに2年間の養成課程に適したシステムの検討を継続して行っている。本システムでは、前提科目を踏まえたOSCE（実習前技術試験：面接試験）・擬似CBT（実習前知識試験：ペーパー試験）の他、1年後期の冬期休暇中に記述式の課題「実習前コンピテンス・アセスメント 実習へ臨む自己の姿勢」（以下、記述式課題）を設定している。平成26年度に本システムに取り組んだA短大の学生の感想において記述式課題に関して「勉強するきっかけになったし、自信につながった」、「自己分析がこの時ちゃんとできたので、自分のことがわかってよかった」等の記載があり、事前学習を開始する契機や自己覚知の機会となっており、この課題の重要性が示唆された。このため、本研究ではA短大で試行した「実習前評価システム（短期大学版）」、とりわけ記述式課題とこれに関するアンケート調査の結果から、課題への取り組みによる学生の自己理解の変化について明確化することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

「実習前評価システム（短期大学版）」では、OSCE、擬似CBTによって学生が相談援助実習に必要な知識・技術の理解や到達度を確認する以前に、第一段階として長期休暇を活用した記述式課題を通じて自己を見つめ直す機会を設けている。特に実習への準備期間が少ない短期大学の場合、学生が実習を意識化し効率的に事前学習や準備を進める上で、段階的な課題の設定と自己覚知の促進が不可欠であると言える。このため、本研究ではA短大において実施した記述式課題を通しての学生の変化に着目する。

対象は、A短大の学生で平成27年度に相談援助実習を行う10名とした。研究の方法は、平成26年12月に記述式課題を配布し、翌年1月の相談援助実習指導の講義内で課題を回収した。この時、記述式課題への取り組みに関してアンケート調査を実施した。回収した課題については3月に各学生に対し、書面にてフィードバックを行った。記述式課題は5項目で構成し、回答方法は、「説明できる」「実行できる」に関しては7段階評価を採用し、

「記述できる」に関しては記入欄を設けた。また、5月中旬にOSCE（短期大学版：5問）と擬似CBT（50問）を実施する予定であり、詳細は当日発表する。なお、本システムでは各試験で得点が6割未満の学生には再試験を実施するが、今回は試行的のため実施しない。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき研究を行った。実習担当教員、学生へ書面及び口頭にて研究協力を依頼した。また、試験結果や調査で得られた回答は統計的に処理を行い個人が特定されないよう配慮すること、科目の成績に影響しないことを伝え同意を得た。

4. 研究結果

各項目の7段階評価の平均値は「1 自己覚知・自己理解」が6.0、「2 対人コミュニケーション」が4.0、「3 自己の判断傾向」が3.8、「4 自己が相手にどう見えているか」が2.7、「5 学習の仕方の理解」が2.9であった。さらに項目1では「自己の髪型」が5.8と高く、「自己の視線」が3.9と低かった。また、項目2では「電話での応答」が3.9と高く、「文章のやり取りに必要な形式を用いることができる」が2.5と低かった。

アンケート調査の結果は、実習前の記述式課題の必要性について「必要」「どちらかと言うと必要」との回答があった。また、課題を通しての自己への影響について「前までは、自分を見ていなかったけど、取り組むことで自分をよく見るようになった。自信を持つべきだと思った」、「できるだろうと言う考えから、できてない、考えよう。と思えた」等の自己評価の変化に関する回答が見受けられた。

5. 考察

記述式課題への取り組みを通して、学生が自明のこととして捉えていた自己について数値や言語によって視覚化され、再認識している。さらに、自分自身を説明することの難しさや実習生としての準備の不十分さへの気づきが誘発され、OSCEや擬似CBTを含めた事前学習の必要性を感じ、気持ちを切り替える分岐点になっていると考えられる。一方、このような“できなさ”に目を向けるため不安を伴う学生もいることから、実習担当教員からのフィードバックは必須であり、学生の特徴に応じた支持的な関わりが連動することで、等身大の自分を受け入れ、実習に臨む姿勢が整えられていくと言える。

また、7段階評価の記述欄の見落としや設問の表現のわかり難さへの指摘があったことから、学生がより回答しやすい記述式課題へ改善する必要性が明らかとなった。

¹ 短期大学版に関して、日本社会福祉士養成校協会北海道ブロック社会福祉実習セミナーで平成21年から5年間報告を行い、自校の状況に応じて実施していることが認知されている。また、本学の試行期も含めた取り組みについて整理した。阿部好恵(2013)「社会福祉士養成教育における実習前評価システムの取り組み」帯広大谷短期大学生涯学習センター紀要(2), 55-61.